
晴れ時々

紺野智夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ時々

【Nコード】

N7603I

【作者名】

紺野智夏

【あらすじ】

幼なじみのタカシが、デートをするらしい。なんだか面白くない洋子は、空に願う。「雨、降っちゃえ」

空は真つ黒、今にも雨が振り出しそうな帰り道。

「明日、晴れねえかなあ」

私の横でタカシがポツリと呟いた。

「タカは何も分かってないね」

「どうして。遊園地に行くんだ、天気がいいほうが良いじゃねえか。」

「張り切りすぎて、鈴野さんに嫌われないように、せいぜい頑張らないよ」

「ったく…可愛くねえなあ、おまえ」

「うるさい、バカ。」

「そんなだからいつまでも彼氏が出来ないんじゃないの？」

「あんたみたいな単細胞には、私の良さは一生分からないのよ」

「んだよ。ようちゃん、顔は可愛いのに、勿体ねえよな」

単細胞に言われたくない。

その言葉を飲み込んでみた。

今更何にもならないのに。

タカシはほんつとにバカなんだ。

明日は雨が降れば良い。

「ようちゃんは、明日、何してんの？」

「雨乞い。」

「…」

「タカの幸せは私の不幸。」

「なんだよそれ」

「昔っからそうでしょ。タカが四年生の時に作文コンクールで金賞とった日、私のゲームボーイ壊れたし」

「おまえが踏んづけたんだろ？うっかり」

「忘れた。とにかくね、タカの幸せは私の不幸なの。アンタなんか俺はようちゃんの幸せを願ってるよ？」

「……」

バカ。

「……タカ、いつから鈴野さんが好きなの？」

「高3のクラス替え。一目惚れした。」

「ふうん。」

たった2ヶ月前じゃない。私なんか1/10世紀の筋金入りなのに。悔しいから考えないことにしよう。

「鈴野さん、可愛いもんねー。清楚な感じ。アンタには似合わない」

「うるせえ、知ってるよ」

「まあ頑張って振られて来なさい」

「……いい加減にしろよ」

「怒った？」

「ったりまえだろ。ようちゃんは人の気持ちをもって考えた方がいいよ。」

アンタに言われたくない。15年間も人の気持ちに気付かなかったくせに。

「まあ俺、晴れ男だし」

「タカには昔から、水難の相が出てるよ」

「なんでだよ」

「泣き虫たかちゃん、ねしょんべんたかちゃん、それから」

「あああああ、聞こえねえ聞こえねー」

「泣かないようにね」

「泣かねえよ」

じゃあな、と軽く手をあげて、タカシは別れ道を曲がってしまった。バスケット部の試合の時も、中学入試の時も、欠かさなかった「ガンバレ」を、ついに言えないまま。

次の日は見事な快晴だった。

神様の意地悪。ホント、これでめでたくタカに彼女が出来たら、呪ってやるから。

鈴野さんは可愛いくて、清楚で、素直で、まるで私とは正反対で、だからこれも神様の意地悪で、私への当て付けで、それで、それは…

うまくいかなきゃ良いのに。

夕方、雨が降ってきた。今さら。雨ってば、空とは切っても切れぬお友達のくせに、空気が読めないらしい。まったくどうという神経してんのよ。

ことの顛末は、意外なところから転がり込んだ。

「洋子、公園にタカちゃんが居たわよ。ずいぶん大きくなったのね

え。」

「お母さん、それ何時頃？」

「買い物に行く途中にみたから、一時間くらい前かしら。」

「まだ居るかな」

「帰りはタクシーだったから、見てないけど…この雨だし、帰ったんじゃないの？」

「……ちよつと見てくる」

私はお父さんの傘を掴んで、マンションの階段を一つ飛ばしで駆け降りた。

バカタカシ。

略してバカシ。

…何いってんの私。

バカなワタシ、略してバカシ。

あれ、一緒。

走った。

からかってやろう。今さら素直になてなれないから。嫌われちゃおうかな。目一杯バカって言ってやろう。

単細胞だから、タカシは。

ヘラヘラ笑ってなきゃ。

雨が肩にかかる。冷たい。寒い。全部タカシのせいだ。居なかったら、ぶつ飛ばす。

居た。

ずぶ濡れになって、東谷に座っていた。

「…ようちゃん」

「タカ…振られたの？」

「うん、降られた」

良い気味だ。

「泣いてたんでしょ」

「泣いてねえよ」

「涙の跡が」

「雨だよ」

ざまあみろ。

「やっぱりタカには、高嶺の花だったのよ」

「…」

「アンタには、一生彼女なんか出来ないよ、きっと。」

泣け。

泣いちゃえ。

「ふざけんな」って、

私の前から消えちゃえ。

「だってタカ、バカじゃん。バカだもん。バカタカシ。…バカ。」

ビンタの一つくらい覚悟してたけど、私の頬が叩かれることは無か

った。

変わりに、目の前には、泣きそうな顔で微笑んでるタカシが居た。

「タカシなんか泣い…」

「ようちゃん！？なんでようちゃんが泣くの！？」

「うるさいっ…アンタはなんもわかってない」

「…そうかもな」

タカシはポケットからハンカチを出して、私に渡した。

なにこれ、びしょ濡れじゃん。…びしょ濡れ、だけど、

「…ありがとう」

「いつもそんなくらい素直でいろよ。そしたらおまえ、凄く」

「うるさい。良いの。私はこれで私なの」

「…俺は、嫌いじゃないけど、でも」

「じゃあ良いの。良いから、帰るよ、帰る」

「…俺は止むまで待つよ」

「傘、はいつてけば？」

「…いや、良い」

せつかく来てやったのに、一人になりたいだど？生意気な。

「じゃあ…また、月曜日に」

「ようちゃん…ありがとう」

「別に…からかいにきたただけだから」

「またな」

タカシはバカだ。

バカだから、私は、タカシのことが。

「……………」

雨音が気の迷いも隠してくれる。たまには空気読めるじゃないか。今後も精進したまえ。

そう思った途端に雨は止んで、でかい傘は無用の長物。やっぱり雨も、神様も、それから私もやあなやつ。

だから、私は笑い続けてやるんだ。やなやつだから。あの単細胞を、ずっと、バカにし続けてやるんだ。ざまあみろ。

空を見上げたら凄く綺麗だった。

こんなふうになれたらいいのに。

素直な気持ちは、夕焼け空に融けていった。

（後書き）

雨が降っていて、気分が落ち込みそうだった時に、
せっかく雨なんだからと雨をモチーフに携帯で打ちました。
たまにはストレートな恋愛小説を！ってテーマで書いてみたもので
す。

書いた日：2008/5/22

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7603i/>

晴れ時々

2010年10月12日02時13分発行